

ラブライブ！シリーズ×ワールドトリガー

レザ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作品名の通りですが、ラブライブ！シリーズ×ワールドトリガーのストーリーです。オリジナル展開になりますので苦手な方はブラウザバックでお願いします。

(基本的にラーサ!!視点になります。)

作者は仕事の傍ら、趣味で作品を書くのでめっちゃめっちゃマイペースな更新になります。ご容赦を……

目次

注意事項＋設定	1
プロローグ	6
第1話「全てはここから」	9
第2話「僕のサイドエフェクトが」	14

注意事項十設定

【注意書き】

ワールドトリガー（以後ワートリ）の世界でラブライブシリーズ（以後シリーズ）のキャラがボーダー隊員となって活動していく話です。そして両作品の設定変わります。許して下さい。

メインはシリーズキャラですがワートリキャラも出ます。ただし女子キャラに限ります。

タグがラブライブ！サンシャイン!!なんですですがスクールアイドル要素はありません。というか入れれる程語彙力無いんです（これだからヲタクは……）。

その代わりラブライブに近いものをやります。

B B Fとか原作の単行本の話とかも盛り込むかと思えますのでワートリのネタバレ注意になる可能性があります。

構成や文章など、小説の基本について詳しくないので思いつきで書いてます。

トンデモ展開あります。殺伐とした展開にはしません。

作者は分かりにくい小ネタとか他作品のパロディとかもしかねないので暖かく見守って貰えると助かります。ラブライブに関わる方皆様に敬意と感謝をもって初めの挨拶とさせていただきます。

【設定】

・物語開始時点でのボーダーにチームランク戦というものが出来て1年しか経ってない設定になっています。それを踏まえてボーダーの所属人数も原作に比べ少ない状態です。

高海隊（物語開始時点）

t e a m p a r a m e t e r

近距離：5

中距離：2

遠距離：1

隊長：攻撃手

高海千歌／高校生／15歳

8月1日生まれ

トリガー

メイン・弧月 旋空 バッグワーム シールド

サブ・シールド グラスホッパー

サイドエフェクト：超直感

※戦闘時や日常生活で自分に影響のある事象に対し発動する。但し、きまぐれであり制御出来ないため違和感程度にしか思えない所が難点。気付いた時の精度はほぼ当たるほど高い。

parameter

トリオン 5

攻撃 7

防御・援護 6

機動 8

技術 5

射程 1

指揮 5

特殊戦術 3

total 40

好きなもの みかん！ カラオケ 運動 ボーダー

嫌いなもの コーヒー 塩辛 暗い密室 血

約8年前の大規模侵攻で父親を失い本人も命を落としかけたが謎

の女性に助けられる。その後ボーダーの正規募集が始まった4年前に応募し入隊。

成長スピードも昇級スピードも至って普通であり特に目立つ事もない隊員であったが、後から入隊してきた渡辺曜と防衛任務をこなしていく事でサイドエフェクトが開花。本人はほえ？つと思つた程度の事が実はゲートの開く瞬間だったり狙撃のタイミングだったりと何気なく凄い事をやってのける自称普通怪獣。

ボーダーの中でも中堅になるためそれなりに顔が広く良くみかんを貰つてランク戦を戦っている。

性格は人懐っこく負けず嫌い。持ち前の明るさと強引さで周囲を次々に巻き込む。とても元気で明るい行動派。やる事なす事基本計画性がなくて勢い任せ。

橙色の髪（赤色に近い）と、赤い瞳を持つ。髪の左側頭部分に三つ編みを作り、制服や普段着時には三つ編みの先に黄色いリボンを、右の髪に三つ葉の髪留めを付けている。頭頂部に短いアホ毛がある。

—————

隊員：万能手（オールラウンダー）

渡辺曜／高校生／15歳

4月17日生まれ

トリガー

メイン・弧月 バッグワーム シールド

サブ・シールド アステロイド（拳銃） ハウンド（拳銃）

グラスホッパー

サイドエフェクト：体感天気予報

※日常生活での精度は今の所1度も外したことが無いという。ただ、ボーダーの基地内に居たりランク戦では発揮出来ない事を悔やんでいる。

parameter
トリオン 6
攻撃 7
防衛・援護 6
機動 7
技術 5
射程 3
指揮 4
特殊戦術 3

total 42

好きなもの ハンバーグ みかん 筋トレ
嫌いなもの 刺身 パサパサしたもの

元々千歌が活動していたボーダーに興味があつたが父親から中学生の間は部活動に専念しなさいとの話を受け高校入学と同時にボーダー入隊をはたす。

スポーツが得意で、特にプール競技が大好き。中学生のときは高飛び込みをしていた。高飛び込みの得意種目は「前宙返り3回半抱え型」。良く基地内のプールで長距離を泳いでいる。本人曰く「無料でプールつかえるのは有難いであります！」との事。他人に水泳を指導する時は厳しい教官になっているという噂。

S級隊員の渡辺月は従姉妹。

性格として高いコミュニケーション能力を有し、考えるよりも先に体が動く。料理のような家庭的な技術が得意で明るい常識人かつツツコミ役。ただ、状況を確認しつつ行動する反面、悩みができると一人で抱え込んでしまう悪い癖を持ってしまっている。よく基地内のキッチンで悩み事相談会が開かれており中学生時代よりも抱え込

む期間が短くなった。

亜麻色の髪と青い瞳を持つ。肩にギリギリかかるぐらいのミディアムヘアで毛先がややパーマがかっている為見た目より髪が長い。

プロローグ

20XX年 あの日、私の、いや私達の人生が大きく変わった。

車が潰れ信号機は倒れ、辺りには人々の悲鳴と建物の壊れる激しい音が鳴り響いていた。

その中で、私はパニックになり近くの家の倒壊した隙間でみかんの刺繍の入った手提げカバンで頭を守り小さくなっていた。

どのくらいこうしていたんだろううってくらい時間が過ぎた時、暗かった視界の一部が急に明るくなった。

助けが来たんだ！

そう思っただけの方を向くとそこに居たのは

口の中に1つの目を持った未知の生物だった。

あまりの恐怖に頭が混乱し声も出せなかった私は、震えることしか出来なかった。

その間も徐々に近づく死への恐怖。

私はここで殺されてしまうのかな。ごめんね、曜ちゃん。と走馬灯のように色んな思い出が頭の中を駆け巡り始めたその時。

1つの目の未知の生物の足が私の体に触れる5cm程先で突如動きを止めた。

そして次の瞬間1つの目の未知の生物の体が縦に真っ二つされ緑色の光が吹き出した。

「やあ 無事かい？ みかん少女」

と真っ二つにされた未知の生物の体をどかして入ってきた1人のお姉さんがそう言った。

私は頷くことしか出来なかったが、お姉さんは「それならよし」と言葉を発し、私を抱きかかえて直ぐにその場を後にした。

その後言葉を話せるようにまで回復した私はお姉さんと話をしな

がら避難所に向かっていた。その間もお姉さんは未知の生物を出会い頭に真つ二つにしていた。

その時に私は「ヒーローみたい……」と自然に呟いていた。するとお姉さんは

「そうかな？でも千歌ちゃんがそう言ってくれたなら私は今からヒーローだね!!」

と凄く嬉しそうに答えてくれた。

そうして歩いていると一際大きな未知の生物がビルを破壊しながら現れた。

しかも口の中にある目からビームを出しながら。

抱きかかえられているのでお姉さんの顔を見るとさつきまでの笑顔が少し引き攣った笑顔に変わっていた。

「逃げないっ」とお姉さんに言うとお姉さんは首を横に振り「あれは放っておけないヤツだから」といい私を地面に下ろしてくれた。

そして「ちよつと後ろに離れてね。大丈夫、私がいる限り何人たりとも傷つけさせやしないから」と私の目線に合わせて屈んでいた所から立ち上がり腰に帯刀していた剣を抜いた。

そこから先は私の目では追えないくらい早い動きだった。右の方から緑色の光が吹き出したと思ったら次の瞬間には左側からも同じような光が吹き出していた。

すごい……と思つて私の気が少し緩んだのを察知したのか未知の生物は目を私の方に向け光を目に集めはじめた。

そして1秒もしない間に私に向かって光が飛んできた。

しかし、私にその光が届く事は無かった。

「言つたはずだよ？誰も死なせないって。」

私と未知の生物の間にはいつの間にかお姉さんが立っていてその前には大きな壁が作られていた。

その後、光がやむと同時にお姉さんは飛び出していき未知の生物の胴体を輪切りにし完全に動けなくしていった。

その後も色々救助や戦闘をしながら私達は避難所に辿り着きその場にいた担当者さんに事情を話終わった所でお姉さんは「私はヒーローだからね！困っている人を助けに行かないと!!」と言い再び三門市の街に向かって走っていった。

その背中を見ながら私は、私も誰かを助けられる人になりたいって思っただよね。

第1話 「全てはここから」

三門市 人口39万人

ある日この街に異世界への門（ゲート）が開いた

「近界民（ネイバー）」

後にそう呼ばれる異次元からの侵略者が門付近の地域を蹂躪。街は恐怖に包まれた。

こちらの世界とは異なる技術（テクノロジー）を持つネイバーには地球上の兵器は効果が薄く誰もが都市の壊滅は時間の問題と思いはじめた、その時、突如現れた謎の一団がネイバーを撃退しこう言った。「こいつらのことは任せて欲しい。我々はこの日の為にずっと備えてきた。」

ネイバーの技術を独自に研究し「こちら側」の世界を守るため戦う組織

境界防衛機関「BORDER（ボーダー）」

彼らは、僅かな期間で巨大な基地を作りあげネイバーに対する防衛体制を整えた。

それから8年

門は依然開いているにも拘わらず三門市を出ていく人間は驚くほど少なくボーダーへの信頼によるものか、多くの住人は時折届いてくる爆音や閃光に慣れてしまっていた・・・

三門市の中心にあるボーダー本部

その近辺、半径9 km以内には無人の住宅街が広がっていた。

何故かといえば、第1次大規模侵攻以前よりゲートが開くようになってきた為、こちら側のゲートの発生位置をある程度手の届く範囲に制限出来るようにという事でボーダーが替りの住宅を用意し全住民に移動してもらったのである。

そんな住宅街の中にある1軒の屋根の上を2人の少女が駆け抜けていた。

そこに1つの無線が入る。

「千歌ちゃん、曜ちゃん、南西2500m方向に発生したゲートからバムスター 5 モールモッド 8 が出現。市街地に向けて動き出してるから気をつけて。」

2人は1度立ちどまり頷きあつてから「了解」と答え、2人はグラスホッパーを起動しゲートが発生した場所へ急行した。

駆け抜けること1分と少し、2人の目の前にバムスター達が見えてきた。

「完全に背後とれたね、このまま奇襲かけちやおうか」

「オツケー千歌ちゃん！じゃあいつものあれやろつか！」

「りよーかいつ曜ちゃん」

と言うと千歌は地面に着地しバムスターに向けて走りだし、対する曜はグラスホッパーを使い今まで駆けてきた高度よりも更に空へ舞い上がった。

そして数瞬後上空から曜が“降ってきた”。いや、正確には“飛び込んできた”という方が正しいかもしれない。

孤月を両手に持ち「前逆宙返り2回転アタック」と叫びながら集

団中央のバムスターの体を斬り裂いたのである。そして更に勢い余って道路のアスファルトに亀裂が走った。あまりの衝撃に周りにいたバムスター達の目がギョツと曜の方を見た。「あれ？私、人気者？」と惚けながら左手に拳銃を取り出し正確に左にいたバムスターの目を撃ち抜いた。その行動で敵だと判断したバムスター達は曜に襲いかかったが曜は後方に大きく飛び距離を取った。

そして敵の存在が自分の視界にいる7体だけである事を確認し再び拳銃を構えハウンドを連射したのだった。

近付いてくるモールモッド達もいたが曜の背後や自身の横側から飛んできた剣の軌跡により次々と活動停止に追い込まれていった。

その後も千歌はグラスホッパーで移動しながら旋空弧月で着実にモールモッド達を仕留めていた。千歌の方を狙おうとした個体もいたが、曜が左手に持った拳銃で注意を引き付け向かわせないようにしていた。

こうして敵の注意が曜に向いた所を千歌が旋空弧月で仕留めるという2人の必勝パターンが嵌った以上、数の不利は関係なくなっていくた。

戦闘を始めてから10分を過ぎた頃、モールモッド達が出現した場所には動かなくなったトリオン兵の山が築かれていた。

「ふいゝ終わった終わったゝ。やっぱりこれだけの数が一気に出てくると中々大変だねゝ」

「そうだねゝ千歌ちゃん」

と千歌と曜が体のストレッチをしているところに不意に無線が入った。

「2人ともおつかれさまゝ。さつき、回収班の方達にお願いしたから

もう少ししたらそつち着くと思うよー」「ありがとうしおりちゃん！いつも助かってるよ」

「いえいえー防衛任務無かったら空いてるし2人と組むのも楽しいからねー」

今、2人の会話の相手であるしおりちゃんこと宇佐美葉ちゃんは玉狛支部所属、玉狛第1のオペレーターの16歳である。千歌には中学校の同じクラスであった事で知り合った。お互いにボーダー所属という事で直ぐに仲良くなりその後千歌が曜とペアを組むまでは玉狛のメンバーと一緒に防衛任務に付き合ってくれていたためちやめちや面倒見の鬼。曜と防衛任務だけできるペア制度になった後も千歌を気にかけており今日みたくオペレーターをしたりしている。また、メガネを愛しているが故に普段用、仕事用、読書用、お出かけ用、就寝用、予備の計六本の眼鏡を所持している。伊達メガネに対しても寛容どころかむしろ推奨的なスタンスを持ち、「メガネがファッションとして取り入れられるのは歴史の必然であり自然の摂理」という意見を持っている。閑話休題……。

「あ、そういえば曜ちゃんに伝言があったんだ」

「ん？何かあったの？」

「月ちゃんがこの後支部に来て欲しいって言ってたよー」

「!? 了解であります！この後行くと伝えておいて欲しいであります！」

その後葉ちゃんと防衛任務の纏めの話をしているとすぐ交代の間が来た為、2人はボーダー本部へ帰還した。

その途中で千歌が曜にさっきの事を聞いていた。

「月ちゃんが来て欲しいって言うのって珍しいよね」

「うん。大体いつも用がある時ってこっちに来るからね、」

「そうなるとうなるんだ…?」

と千歌

「多分ね千歌ちゃん、月ちゃんのサイドエフェクト絡みだと思うよ。そして来てっていう事は人に聞かれたくない感じなのかも」

そう言う曜を見て千歌は『ほえー』という言葉しか出なかったが心のどこかに少し引っかかりを感じていた。そして交代の部隊と引き継ぎをして2人は玉狛支部へ向かうのだった。

「さて、千歌ちゃん、曜ちゃん、チームランク戦に参加しないかい？」

第2話 「僕のサイドエフェクトが」

川の真ん中に建てられた3階建ての建物。綺麗と呼べるほどの外見では無いが、その造りは並の災害には耐えられるようしっかりしている。

土手と建物を繋ぐ橋を渡れば、扉の上の壁に玉狛のエンブレムが描かれている。

ここは玉狛支部。その建物の入口に、千歌と曜は立っていた。

「いつ来てもここは慣れないなあ」と千歌は小声でそう呟いた。千歌も曜も一応本部出身である。ただ、出身というだけで、基本的にはどこの派閥にも入らずプラプラとしているが：実際に部隊を組んで無いのもぶつちやけ派閥関係のしがらみが面倒という理由であつたりしなくもない。

とはいえ、そういう隊員は意外という。特に加古さんや朝香さんなんかは、その典型的な例だ。

「ヨーソロー！」

そう言いながら扉を開ける曜の後に続く、そこにはカピバラがいた。

もう一度言おう。カピバラが、いた。

更に言うと、そのカピバラは子供を乗せていた。

「あ、陽太郎久しぶり〜」

「ひさしぶりだな、よう、ちか。うちにはいるきになったのか？」

「違うよー月ちゃんに呼ばれて来たんだ」

「・・・そうか」

と、フランクに話す曜とカピバラに乗って落胆している陽太郎が話をしていると奥の方から帽子を被った月ちゃんが姿を見せた。

「ごめんね曜ちゃん、呼びつけるみたいな事をして」

「全然大丈夫だよーなんたって月ちゃんもS級隊員なんだから」

と曜は少し揶揄うような口調でそう言葉を返した。

と、ここでS級隊員について少し解説的なものをしよう。

S級隊員とは黒（ブラック）トリガーを所持するボーダー隊員の階級である。A・B・C級のヒエラルキーから外れランク戦にも参加できない、黒トリガー所持者のための例外的な階級である。

基本的に単騎での戦闘が前提となるためチームを組むことはない。桁違いの性能を有する黒トリガーだが、ボーダーが製造したトリガーではないため緊急脱出（ベイルアウト）の機能は付いていない。撃破された場合には生身と黒トリガーそのものを敵前にさらす事になるため、性能に比例して高いリスクを抱えている。

現在ボーダーに所属しているS級隊員は渡辺月と高坂真澄、上部尋代の3人である。閑話休題……

「そういえば月ちゃん、どうして千歌ちゃんも玉狛に呼んだの？」

「ああ、今日は桐絵ちゃん達が居ないから夕飯でも一緒にどうかなって」

と答える月に対して千歌は内心なんとも言えない違和感を感じていた。

その後、千歌達は途中で作戦室から出てきた栞ちゃんと雷神丸に乗ってきた陽太郎を含めた5人で月特製ピザを談笑しながら平らげた。

食事を終えて栞ちゃんが流しで皿を洗っていると月ちゃんがおもむろに口を開いた。

「ここからが本題になるんだけど……」というと一度言葉を切り深く息を吐いた。

「千歌ちゃん、曜ちゃん、チームランク戦に参加しないかい？」

どのくらいの間静寂が居座っていただろう。

恐らく栞ちゃんが「どうしたの？」と声をかけてくれなければずつと固まっていたのではないだろうか。

千歌と曜は想定外の話の展開に頭の整理が全く追いついていなかった。

先に再起動したのは千歌だった。

「え、どういう事なの月ちゃん？なんでチームランク戦？」

「いやー本部からの指示でね。トリオン兵撃破数No.3の肩書きを持つペアの実力は放っておけないのよ。それにね千歌ちゃん。曜ちゃんと協力して他のチームと戦ってみるのは楽しいと思うよ？それに2人なら大丈夫だって。僕のサイドエフェクトがそう言うてるから。」

そう言われ千歌は玉狛に来る前に感じていたモヤモヤが胸の中から消えるのを感じた。

そして曜に向かって

「曜ちゃん！チームランク戦に出よう!!」

と言い放った。

だが曜は未だ処理が追いついてないのか何故か表情が明るくなかった。

「でも千歌ちゃん。チームランク戦って事は戦う相手には、あの果南ちゃんとかも居るってことだよ？」

という曜に対して千歌は思いつきり曜の両手を掴んだ。

「それはソロランク戦と同じ事だよ。いずれは越えないといけないわけだし。大丈夫！曜ちゃんがいてくれるなら千歌は、千歌達は勝てるはずだって!!」

と目を輝かせながら答えた。

その目にやられたのか、はたまた観念したのか曜は「千歌ちゃんがそう言うなら…」と苦笑しながらそういった。

「でもオペレーターはどうするの？当てはある？」

と曜が千歌に聞くと顎に手を当てながら「そこなんだよね……あははは……」と返ってきた。

「月ちゃんは誰かフリーのオペレーター知らない？」

「ごめんね曜ちゃん。本部のオペレーターに関しては僕あんまり詳しくないんだ……」

と月が答えると3人になんとも言えない空気が漂った。

だが、この空気を振り払ったのはやはり栞ちゃんであった。

「安心して2人とも！さつき心当たりのある1人に声掛けておいたよ。明日のお昼頃なら空いてるっていう話だから本部食堂に12時集合ね！」

と言い放ちメガネをクイツとさせた。

「ありがとう栞ちゃん！」

「何のなんの。本当は私が千歌ちゃん達と組みたいって気持ちもあったけど、今は玉狛第一のオペレーターだから出来ないし……せめてこれくらいはしてあげたいなって。だからね、2人とも。チームランク戦楽しみにしてるよ！」

と少し照れくさそうに言う栞に2人は思わず抱きついていった。その3人の目には少しばかり光るものがあつた。

次回予告

千歌と曜が食堂で待っている所に栞が引き連れて現れた人物とは

!?